

●第一夜／宝生流・観世流

1995.10.6(金)

PM6:00～PM8:25

会 場：高崎観音山・カップシアター駐車場
雨天の場合は群馬音楽センター

「宝生流・観世流による公演」

【狂言】清 水（大藏流）山本則直・山本則孝

【仕舞】田 村（観世流）川原恵三

杜 若（観世流）武田安弘

玉乃段（観世流）下平克宏

【能】熊 坂（宝生流）高橋 亘・大坪喜美雄・
近藤乾之助

●第二夜／黒川能

1995.10.7(土)

PM5:30～PM8:55

会 場：高崎観音山・カップシアター駐車場
雨天の場合は群馬音楽センター

「黒川能による公演」

【能】大 瀬 若 （黒川能保存会）

【狂言】こんかい、【釣狐】（黒川能保存会）

【能】木曾順書 （黒川能保存会）



10周年記念公演(第二夜)

重要無形民族文化財

庄内

黒川能

黒川能

山形県柳町黒川地区に伝わる黒川能は、世阿弥が大成したあとの猿楽能の流れを汲んでいる。その意味では現存の五流（観世・金春・宝生・金剛・喜多）の能と同系であるが、いずれの流儀にも属さぬ独特のかたちを持ち、現五流には亡びてしまった演目や演式も数多残している。

いわゆる民族芸能という規模をはるかに越えた、貴重な文化財といえよう。しかもこのように高度な芸能が少なく見つっても500年、春日神社への信仰を支えに、すべて農民の手によって、生活の中で伝えられてきた氏子そのまま能楽者なのである。

黒川能の起源については、いまだ定説はない。黒川には、後小松天皇第三皇子小川宮が能を伝えたとする伝承もあるが、古文書の調査などから、13～16世紀、庄内地方を領有していた武藤氏に何らかの関係があったものと考えられている。

武藤氏のあとには最上氏、元和8(1622)年には酒井氏が庄内を領有し、その後明治まで、酒井氏の多大な援助をうけて、黒川能は大いに発展する。その後明治維新、第2次世界大戦とさまざまな難関があったが、いずれも黒川住民の信仰と勤勉さと生命力でのりこえて、昭和51年5月4日、国の重要無形民族文化財に指定された。

黒川には、2月の王祇祭、3月の祈年祭、5月の例大祭、11月の新嘗祭と上座、下座の能を春日大社に奉納する祭典がある。7月の羽黒山の花祭り、8月の荘内神社への奉納能も毎年かかさず。

能

大般若

鑑賞：三蔵法師が大般若経を伝えようと天竺へ向かう途中、西域の流沙河まで来たとき一人の老人に出会う。老人は、この川は深さ千尋（ちひろ）の難所だし、向こうに見える慧鏡（れいそう）も天険で、まず越えることは困難だという。

なお老人は、この川の主は深沙大王と称し、鬼のような姿をしているが心では仏法を敬っている物語り、実はあなたは前世でも大般若経を得ようと志していたが、いつもこの地で命を落とすのだと話す（〈クセ〉）。三蔵が驚いて老人の名を尋ねようと、自分こそ深沙で、今度こそ経を与えようと言って消え失せる（中人）。三蔵法師が待っていると言葉が現われて舞臺を奏し、大竜、小竜が三蔵を拝する中に、大般若経の笈（おひ）を背負った深沙大王が現われ、笈を開いて三蔵に経文を見せ、この経の守護神となると約束して笈を与えて去る。

流沙河に住む深沙大王が、大般若経を求めて砂漠を渡る三蔵法師を助ける話の舞台化。風流能。前場はほぼ夢幻能の定型どおりだが、アイの〈立シャベリ〉のあと、軽快な〈下り端〉で登場する菩薩と、〈下り端ノ舞〉や、露払いとして登場する後シテ・深沙大王の威容は、異国の神々が雲のように湧き出して列座する感じで、スペクタクルの妙がある。1983年（昭和58年）、堂本正樹、梅若紀彰（としての）らの手で復活上演され、以後、数度演じられている。黒川能では現行演目。別名「三蔵」「三蔵法師」。なお、復曲の際は前ブレを出さず、逆に後ブレ・天女を二人出した。

狂言

こんかい（釣狐）

鑑賞：「名残ののちの古狐こんかいの涙なるらん」と次第を詠った古狐は、一族を釣り絶やされ、今はわが身もねらわれていると

述べる。そして今日は漁師の伯父坊主白蔵王に化け、意見を思い止まらせようと思って来たと言う。やがて道行き誤り、犬のはえ声におびえたりしながら、その住まいを訪ね、狐の執心のおそろしさを玉藻の前の故事に事寄せて物語る。

漁師が改心すると即座に笈を捨てさせ、さっそく別れを告げる。ところが喜びのあまり小歌を詠ながら帰る途中で捨てさせ、戻りに行き当たると餌は好物の油揚げなので、それにひかれて度度も飛びかかろうとする。やっと思ひ留まり、化身の衣装を脱ぎ身軽になって食いに来ようとする。

かつてない伯父の夜半の来訪と、その言葉の端々に不審をいだいた漁師は、捨てがけにしておいた笈に狐の覚らし跡の認められるのに、さてはとときどき、かけ直して待っている。そこへ正体を現わして近づいて来た狐は、初めのあいだは用心深くせせっているがつかいかかり、漁師と引き合う。そして必死にはずして逃げていくのを、漁師が追い込む。

能

木曾願書（きそがんしょ）

鑑賞：越後で平家に破れた義仲は、越中砺波（となみ）山麓殖生（はにゅう）に陣をかまえ、次戦には平家を俱利伽羅（くりから）谷に追い落とす高計を練っていた。折りから、付近の森の中に源氏宗廟の神たる八幡宮を見つけ、参謀の覚明に勝利祈念の願書を書かせて奉納した（説書〈願書〉）。ちょうど土地の者が酒肴をたずさえて門出の祝福にやってきましたので、義仲は酒宴を開き、幸先を祝って覚明に門出の舞（〈男舞〉）を舞わせるのだった。唯一現行の観世も明治の復曲だが、下掛りの節付で、後場は俱利伽羅落としの場の続く「木曾願書」が残る。同じく下掛りの節付きの無限能「太刀塚」にも本曲の節立てが語られ、開曲「俱利伽羅落」をそっくり含み、「卒塔婆小町」と同文のキリがつく。

■第一夜スケジュール

17:00 能に親しむ集い（演目解説）（30分）

17:30 休憩（30分）

18:00 挨拶・火入れの儀（30分）

18:30 狂言（30分）

清木（大氣流）山本剛直・山本剛孝

19:00 仕舞（10分）

田村（観世流）川原恵三

社若（観世流）武田安弘

玉乃段（観世流）下平史宏

19:10 休憩（15分）

19:25 能（60分）

熊坂（宝生流）高橋 且・大坪喜美雄・近藤乾之助

20:25 終演

■第二夜スケジュール

16:20 能に親しむ集い（演目解説）（40分）

17:00 休憩（30分）

17:30 挨拶・火入れの儀（30分）

18:00 能（60分）

大般若（黒川能保存会）

19:00 休憩（15分）

19:15 狂言（30分）

こんかい（釣狐）（黒川能保存会）

19:45 休憩（10分）

19:55 能（60分）

木曾願書（きそがんしょ）（黒川能保存会）

20:55 終演